

# 九州産業大学大学院

KYUSHU SANGYO UNIVERSITY GRADUATE SCHOOL



令和2年度 研究成果発表会

## 情動調整プロセスの阻害要因に関する研究 —情動への恐れに焦点をあてて—

博士前期課程

国際文化研究科 国際文化専攻 臨床心理学研究分野

原田佑希

主査 窪田由紀  
副査 伊藤弥生  
木船憲幸

## 研究の背景

- **情動調整**：情動の表出・抑制  
⇒他者との良好な関係の形成や環境適応のために必要
- 情動調整プロセス  
⇒身体反応からの、**情動への気づき**が重要
- 金築ら(2010)：**情動への恐れ**(自己の情動をコントロールできなくなるのではという恐れ)を提唱 ⇒情動への気づきを阻害
- 情動への恐れに影響する要因の検討が必要

# 問題と目的

## ● 評価理念

「他者からの評価に対する心配や、否定的に評価されるのではないかという予測に対する心配」

⇒ 情動の恐れを介して主としてネガティブな情動への気づきを抑制する可能性  
(大河原, 2002, 2003)

## ● 自己肯定感

「自らの気分の調整、あるいは緩和させることの出来る自信」に関する要因  
(福森・小川, 2009)

⇒ 「自分の調整の自信」、「成長の意思」が不快情動との直面を促進

本研究の目的： 評価懸念と自己肯定感が情動への恐れにどのような影響を与えているのかを明らかにし検討する

# 研究の概要

日本語版  
Affective  
Control Scale  
(金築ら, 2010)

調査対象者：125名  
(男性：37名, 女性：87名, どちらでもない：1名)

評価懸念尺度  
(岡田・渡田,  
1992)

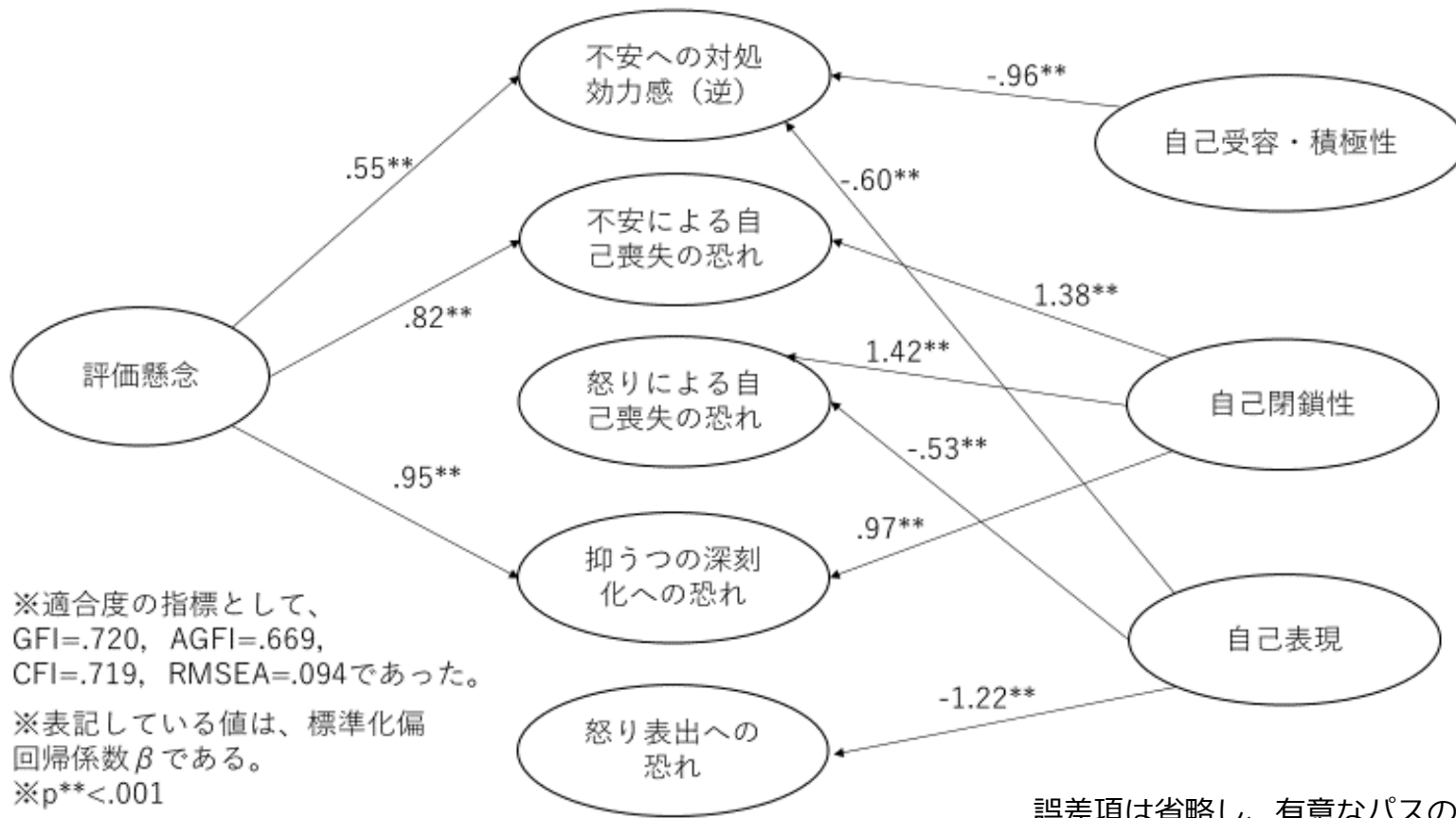
調査方法：Googleフォームで質問紙を作成し、授業にURLを配布してもらい調査を依頼した。

調査時期：2020年7月～10月

自己肯定感尺度  
(平石, 1990)

倫理的配慮：質問紙の表紙に協力の任意性、匿名性の確保、学術研究へのデータの使用を明記し、同意欄のチェックを得て同意を確認。

# 結果



## 結果のまとめ

評価懸念：他者からの否定的な評価への不安

➡ 不安を感じることに對する不安をもちやすく、自分をコントロールすることができなくなる  
1度落ち込んでしまうと、落ち込み過ぎてしまうと恐れを抱きやすい

自己受容：自分のありのままを認めることができる

自己表現：自分の意見や考えをはっきりと言える

➡ 不安に上手く対処することができる  
怒りを感じても、自分をコントロールすることができ、建設的に怒りを表出することができる

自己受容や自己表現を促進する働きかけにより、情動への恐れを緩和する可能性

## 今後の課題

- 情動調整過程の検討

評価懸念、自己肯定感が徐堂への恐れを介して、情動への気づきにどのような影響を与えるかについては未検討。

- 情動への恐れ の測定方法

質問紙調査によって意識レベルで測定。

果たしてそれが妥当であったかについても検討の余地。

- 影響モデル

適合度の値が不十分。尺度の妥当性の検討が必要。

## 指導教員コメント

- ・ 情動調整過程の中で情動への気づきに着目し、その促進に向けて多くの文献を検討する中で、「情動への恐れ」を取り上げ、さらにその促進・阻害要因の検討を目的としたことは臨床的にも意義深い。
- ・ しかしながら、「情動への恐れ」に関連し得る概念として「自己肯定感」を取り上げた根拠が不十分であり、また、「評価懸念」も含めて、尺度の妥当性の検討が不十分だったことが、モデルの適合度の低さに繋がった可能性が大きい。
- ・ 結果について、十分な文献検討に基づく説得力ある解釈が求められる。

窪田由紀